

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
 【部門区分】第 6 部門第 2 区分
 【発行日】平成25年6月6日(2013.6.6)

【公表番号】特表2012-529082(P2012-529082A)
 【公表日】平成24年11月15日(2012.11.15)
 【年通号数】公開・登録公報2012-048
 【出願番号】特願2012-514141(P2012-514141)
 【国際特許分類】

G 1 0 L 19/005 (2013.01)

【F I】

G 1 0 L 19/00 3 3 0 E

【誤訳訂正書】
 【提出日】平成25年4月8日(2013.4.8)
 【誤訳訂正 1】
 【訂正対象書類名】明細書
 【訂正対象項目名】0 0 2 5
 【訂正方法】変更
 【訂正の内容】
 【0 0 2 5】

フレーム消去補償処理の品質は、音声パラメータを再構成する際の精度に伴って改善する。再構成されたスピーチパラメータのより高い精度は、フレームのスピーチコンテンツがより高いときに達成され得る。一例では、無音フレームは、スピーチコンテンツを含まない場合があり、したがって、何の音声品質利得も提供しない可能性がある。したがって、音声復号器 208 の少なくとも 1 つの構成では、フレームレートが音声品質利得を達成するために十分高いとき、将来のフレーム内の音声パラメータを使用できる。例として、先のフレームと将来のフレームの両方が無音符号化モード以外のモードで符号化される場合、音声復号器 208 は、消去されたフレーム内の音声パラメータを再構成するために、先のフレームと将来のフレームの両方の中の音声パラメータを使用できる。すなわち、先のフレームと将来のフレームの両方がアクティブスピーチ符号化モードで符号化されるとき、エンハンストパケットロス補償が使用されることになる。そうでない場合、消去されたフレーム内の音声パラメータは、先のフレームから再構成され得る。このアプローチは、音声品質利得の尤度が低いとき、フレーム消去補償プロセスの複雑さを低減する。フレーム消去の先のフレームと将来のフレームとに関する符号化モードを表示するために、(下でより十分に議論される)フレームエラー検出器 226 からの「レート決定」を使用できる。もう 1 つの構成では、2 つ以上の将来のフレームがバッファ内に存在し得る。2 つ以上の将来のフレームがバッファ内に存在するとき、そのより高いレートのフレームが、より低いレートのフレームよりも消去されたフレームからさらに離れている場合ですら、より高いレートのフレームを選ぶことが可能である。

【誤訳訂正 2】
 【訂正対象書類名】明細書
 【訂正対象項目名】0 0 6 2
 【訂正方法】変更
 【訂正の内容】
 【0 0 6 2】

フレーム消去が発生し、バッファ 202 内に少なくとも 1 つの将来のフレームが存在するとき、デジッタバッファ 202 は、将来のフレームを送るかどうかを決定する役目を果たすことができる。1 つの構成では、バッファ内の第 1 の将来のフレームが無音フレームでないとき、かつギャップインジケータ 708 がある値以下であるとき、デジッタバッファ

ァ 2 0 2 は、第 1 の将来のフレームを復号器 1 0 8 に送ることになる。例えば、このある値は「 4 」であってよい。しかしながら、先のフレーム 7 2 0 が従来の P L C 方法によって再構成され、先のフレーム 7 2 0 が連続して第 2 の従来の P L C フレームである状況において、ギャップインジケータがある値以下である場合、デジッタバッファ 2 0 2 は、将来のフレーム 7 1 0 を送ることができる。例えば、このある値は「 2 」であってよい。加えて、先のフレーム 7 2 0 が従来の P L C 方法によって再構成され、かつ先のフレーム 7 2 0 が連続して少なくとも第 3 の従来の P L C フレームである状況において、バッファ 2 0 2 は、将来のフレーム 7 1 0 を復号器に供給しない場合がある。